子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

# 文化高知

2000年11月 NO.98

「やまもも」 池 敬子

〈もくじ〉

文化研究はおもしろい …… 堀見矩浩 2
高知の魅力発見 …… 岡田一夫 3
未知への挑戦 超電導発電機の研究開発 …… 上田隆右 4～5
下流地域の人として …… 泉田佳伸 6～7
魚談義あれこれ③高知の魚 …… 岡村 収 8～9
こんなことがあったぞね・修学旅行に行ってみれば …… 中山俊子 10～11
「山旅はいいんだな」 …… くにみつゆかり 12
涙の学芸員ブルース …… 松本教仁 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

# 文化研究はおもしろい

堀見矩浩

横倉山自然の森博物館館長時代のことである。

今春三月、田中白歩先生の書作展『白歩の書展―自然憧憬―』を開催した。この展覧会で人目をひいたのが、郷土詩人五人の近代詩を書いた作品であった。そのなかでわたしが特に気に入ったのが、今は故人となられた吉本青司先生の詩であった。

この山の空氣を
しょうりき呼吸して
でかい人間が生れエで
どうするぜよ

山の偉大さが朴訥な方言で語られている。失礼な言いかただが、わたしの座右銘「地霊人傑」―すぐれた土地柄がすぐれた人物を生む―が書かれていたので、ときどき会場に足を運んで、ひとりほくそ笑みながら鑑賞していた。しかしそのたびに、「この山」とはいったいどこの山であろうかという疑問があった。

青司先生は今は越知町になっている旧横畠村の出身であるので、どうも横倉山ではないだろうかという思いはあった。しかし証拠はなかった。

ところが、ある日、吉本未亡人が会場に来られたのでお尋ねすると、「そうです。たしかに横倉山をイメージしたものです」とおっしゃられた。証言を得たのである。

ならば横倉山を冠詞とする博物館にふさわしい詩ではないか。それが濃墨を使って肉太の線で書かれており、詩人と書家が一体となって創作した傑作ではないか。ぜひ博物館に残しておきたい、頂戴したい、と思って先生にお願いしてご寄贈いただいた。現在、博物館に展示してあるのがそれである。わたしの残した書「山語」の扁額と同じ部屋に……。

ところで、「麦の会」の伊藤経子さんも展覧会も見てこの書が気に入っていた。

三月末に博物館長を退いたわたしは、町内に事務所を借りることができたので、四月から越知地域文化研究所を開設した。地域文化のよろず相談所である。

研究所を開いてまもなく、伊藤さんから「この山の」の書のコピーがほしいという電話があった。国語の授業に使いたいというのである。そこでわかった。子どもの教材にふさわしい書であることが。

伊藤さんは教員を退職後も国語授業の研究サークル「麦の会」をつくり十年来活動をつづけている。だからこの詩を子どもたちに読ませたい、それも、活字ではなく、白歩先生の書を生の教材として子どもに与えたいというのである。なるほどと思ったので早速コピーして送った。

するとまもなく、こんどは研究授業をするので見に来てほしいという。七月であったが早速行って、子どもたちがコピーを手に、目をこらし、くり返しくり返し味読・熟読する場面を見せてもらった。

会場は高知市ではなく安芸市であった。「この山の」は高知市を飛び越えて安芸市まで運ばれたのである。詩人と書家の創作になる文化が伝播したという思いを強くした。

青司先生にはこの詩のほか、横倉山に取材した伝詩「春分点を越えて」「登攀」等がある。伝詩とは伝説の詩という意味であろうか。横倉山の伝説はロマンがあり、文学的価値があるとして作品化されたのである。

そこでまた次である。横倉山伝説は地域文化であるので、伝詩の一つである「登攀」を郷土人形芝居の伝統を継ぐかがし座の茂松延章さんにお願いして人形劇にしてもらうことにした。このほどそれが『御嶽異聞―石菖物語』に仕上がり、十月の安徳帝八百年祭で上演されることとなった。

『白歩の書展』にはじまり、「この山の空氣」が博物館に展示され、詩と書が国語の授業の生の教材となり、伝詩「登攀」が人形劇になった。文化を次から次へと反応させることができたと思っている。これをわたしは文化コンサルタントとよんでいる。

お世話はまだつづいている。だから文化研究はおもしろい。

〔二〇〇〇、九、十六〕

（ほりみのりひろ／越知地域文化研究所所長）



# 高知の魅力発見

岡田一夫

## ■高知とわたし

高知市はわたしが五歳から小学校五年生までの子ども時代を過ごした町です。高知城でのお花見、鏡川でのシジミ採り、筆山での冒険、日曜市や冬の椎の実焼き、芋ケンピにプール遊び後の生姜味の飴湯、チンチン電車に関西汽船のドラの音や色とりどりのテープの乱舞、鳴子踊りによさこい祭り、おっかない土佐犬に不思議な尾長鶏、桂浜でのお月見、赤い色のはりまや橋、市営球場でのカチワリなど高知は忘れられない大切な思い出の地です。

その高知に行ってみたい。平成八年五月に連休を利用して実に三十七年ぶりに忘れられない高知を妻と再び訪れました。

その初日は通った潮江小学校や住んでいた家、遊んだ原っぱなどの子どものころの思い出を求めましたが、過ぎ去った長い時間は町の面影をすっかり変えていました。しかし桂浜の潮風、鏡川に筆山と五台山の風景、土電の走る音、活気いっぱいの日曜市など変わっていない高知の空気をひさしぶりに味わうことができました。

## ■観光客 in kochi

当時を探し回るわたしに妻が不満そうな顔を向けます。そう彼女は土佐kochiに来た観光客だったことをすっかり忘れていました。

桂浜と坂本龍馬像に闘犬、はりまや橋に高知城、五台山・竹林寺や自由民権記念館などの主な観光施設回りをひと通り終えた日、妻に高知で一番おもしろかったところはどこかと尋ねると「土電の車庫」と答えた。

その理由は、世界中の路面電車が並び、まるで博物館のようだが展示物ではない。一定のリズムで電車が車庫に滑るように入ってくると、よく手入れされ出番を待っていた電車が青い空をバックに広い道路真ん中の線路に出ていく。映画のいちシーンのようで何時間見ていても飽きないし、電車を世界中から集めてのリサイクル利用。ここ高知の町で再び走らせるという発想がkochiらしいという。

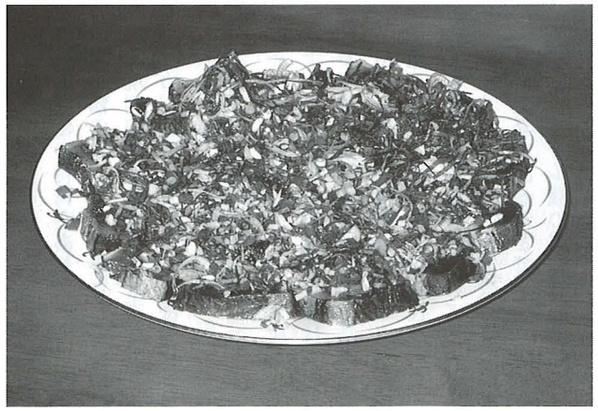
日曜市も気に入ったようで、特に横浜であまり見かけない総菜や野菜を見つけるとお店の人に納得できるまで質問を続けていたが、お店の人はいやな顔ひとつせず親切に答えてくれていた。その間わたしはただただ待っているだけ。

観光者一人ひとりの求めるものを見極めるのは容易ではありませんが、観光地の魅力というのは訪れる人が日常では味わえない異文化を体験し、見たり触れたりすることができる土地柄にあるのではないかと思います。彼女の高知での異文化空間は「土電」と「たべもの」であり、それを十分に満足させた場所が路面電車の車庫と日曜市だったらしい。

視点を変えればまだまだたくさんの観光資源を高知は秘めているに違いない。今度はわたし自身が観光客として新しいkochiを再々発見してみたい。

写真は、母のレシピをベースに高知を旅行して以来妻が作ってくれる我が家特製の「カツオのたたき」です。横浜に住んでいるわたしの大好きなkochiの味です。

（おかだかずお／財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー観光部長）



未知への挑戦

# 超電導発電機の研究開発

## ――産・官・学の英知と総力の結集がキーワード――

上田隆右

### はじめに――超電導とは

南国土佐を後にしてほぼ半世紀になりますが、当時を振り返るとわが国の科学技術の隆盛とりわけ近年の高知の産業、科学・技術、工業教育の発展は、工科大学の設立と相俟って、目を見張るものがあり、隔世の感が致します。

私自身も関西電力から出向し超電導発電機という最先端技術の開発に携わり、世界に伍して微力ながら全力を尽くすことができたことは、技術者冥利につきる喜びでもあります。

さて、十余年前、毎日のように新聞紙上をにぎわした「超電導」をご存知ですか？「ある種の物質を極低温に冷却すると電気抵抗がゼロになる」というすばらしい現象で、この超電導技術は、身近なところでは多くの病院で活躍しているＭＲＩに使われており、さらには次世代新幹線として注目されているリニア・モーターカー、無限のエネルギーを生む核融合発電など広範囲の応用が期待されているものです。まさに二十一世紀のキーテクノロジーであり、高度で豊かな社会を実現するため世界各国で研究が進められています。

この夢の多い先端技術を電力機器、とりわけ実用化の先駆けとなる発電機に適用を図ろうとする国家プロジェクトが昭和六十三年に発足しました。以来今日まで、産官学の英知と総力を結集し研究開発を推進した結果、世界でも前例のない大容量の超電導発電機の開発に成功し、実用化に向けて大きく前進することができました。

### 超電導発電機の必要性とメリット

着実に増大すると予測される電力需要に対処するため、発電・送電設備が新・増設されていますが、発電所の大容量化・遠隔化に伴い送電線用地の確保困難、電力系統の安定度などの問題が顕在化しています。また、省エネルギー・省資源を推進するため、電力損失のいっそうの低減が求められています。

超電導発電機は、現用発電機に比べて、発電効率向上、機器の小型化・軽量化、電力系統安定度の向上など多くの特長があり、電力システム全体のコストダウンとともに地球環境問題（$CO_2$削減）にも寄与できるため、早期の実用化が期待されます。

### 超電導発電機の研究開発――成果と展望――

プロジェクトの最大目標は、七万ｋＷ級超電導発電機（モデル機）を設計・製作し、運転研究により基本性能、メリット、運転信頼性を明らかにすることにより、次の二〇万ｋＷ級パイロット機（実用機の前段階）の技術確立を図ることです。

このモデル機の実証試験は順調に進み、昨年六月成功裡に終了し、国際的にも高い評価を受けた次のような成果をあげることができました。

・世界最高出力七九ＭＷの発電に成功（アメリカＧＥ社の二〇ＭＷ）

・世界最長一、五〇〇時間の連続運転を達成（小型実験機で一〇〇時間）

・実際の七七ｋＶ電力系統に連系して世界最大の四〇ＭＶＡＲ無効電力を需要家に供給（大型機での実績はない）

このビッグなニュースは、ＮＨＫテレビなどマスコミでも大きく取り上げられ、また、昨年秋スペインの国際会議に招待され講演しました。



今や超電導発電機の研究開発では、ドイツ、アメリカなど先進国を追い越し「世界のトップランナー」になっており、日本の開発動向が注目されています。

今後は、最近の厳しい経済状況を反映していっそうのコスト低減、大容量化など、導入促進の基盤となる研究を進め、その後パイロット機による総合的な技術検証を経て、二〇一〇年代には実用化に至るものと想定されています。

### 大型プロジェクト推進のマネージメント

国の大型プロジェクトを振り返ってみますと、組合を構成するメーカー間の「競創（競い共に創造）と協調（水平展開）」による挑戦的な研究をモットーに、「産官学の技術の輪と人（研究者）の和」を大切にし、共通の試験装置による客観、公平な導体評価、八甲田山雪中行軍の教訓を生かした前人未踏のモデル機の実証試験など研究に携わる全員が結束して進めてきました。毛利元就の「三矢の訓」と「百万一心の碑」（一日一力一心）の精神、コロンブスの「パイオニアスピリット」が、世界をリードする独創的、革新的な技術開発を効率的に推進させ、また、将来の実現に向けたひとつのキーワードではないかと考えています。

### 高知の発展のために――おわりに

大阪・高知間に長年運行し親しまれてきたＹＳ11が、今年八月末で運休することとなり、時代の流れとはいえ寂しい限りです。ＮＨＫスペシャルで紹介されていましたが、この国産旅客機は、優れた零式戦闘機の技術を、戦後の混乱の中いちはやく生かした安全性の高い最高の傑作で、この研究プロジェクトにかけた多くの技術者の「未知への真摯な技術の挑戦、涙ぐましい開発努力」に感動と共感を受けました。

高知ではベンチャービジネスの育成に高知工科大学を核として精力的に取り組まれ、また、新たな社会経済システムの構築に向けた高知県社会経済生活維新「ＫＯＣＨＩ　２００１　ＰＬＡＮ」など産業界・行政・大学をとりまく数々のプロジェクト、ネットワーク化が全国に先駆け積極的に進められていると聞きます。

二十一世紀は、エネルギー・情報化・地球環境の時代といわれています。産官学の相互信頼のもとにいっそう連携を密にし、花道を去る〝ＹＳ11〟の魂を引き継いで、これら先進的・斬新的な事業の成功により、我が故郷・高知のさらなる発展・繁栄を心から祈願しております。

（あげたたかすけ／超電導発電関連機器・材料技術研究組合　顧問・前常務理事）

世界最長連続運転(1500時間)に成功

ＮＨＫ総合テレビのニュースより（平成10年８月19日放映）

# 下流地域の人として
## ―「どんぐり銀行」と交流の森づくりから―

泉田佳伸

ある日突然メールがやってきた。僕のホームページ(＊)を見た「文化高知」の方からだ。僕に原稿を依頼したいという。僕のような名もない人間の文章で本当にいいのか、ちょっと不安だったりする。しかしこれも何かの縁だろうし、僕なりの考えるところを書かせてもらおうと今キーボードを叩いている。

社会の環境への関心が高まっているなかで、当然森林への関心も高まっている。その反面、それが森林保全活動にはうまくつながっていない現状がある。それならまずは「森へでかけてみよう」、これが「どんぐり銀行」のコンセプトだ。

「どんぐり銀行」は、どんぐりを預金すると苗木にして払い戻されるというユニークな仕掛けで、市民と森とのつきあいを深める活動を展開している。どんぐり拾いは森へのきっかけづくりだ。そしてそこから森で遊んだり、森について考えたり、さらには森づくりと広い範囲での森への関わりを提供している。

「どんぐり銀行」の活動は主に「NPO(特定非営利活動)法人どんぐりネットワーク」というボランティアグループがサポートしていて、僕も当然そのメンバーの一人。しかしまだまだ駆け出しで、ボランティアをしているというよりは他のメンバーの邪魔をしながら、森の中で遊ばせてもらっているという感じだ。

「どんぐり銀行」の森づくりは香川県内の四カ所のフィールドを中心に行われているが、高知県土佐郡大川村の村有林をお借りして行っているのが「交流の森づくり」だ。単に早明浦地域を訪問するのではなく、地元の方たちの協力のもと水源の森づくりをやろうという趣旨で、地拵(じごしら)えと植林、下刈り(下草刈り)の作業を一般参加の形でやっている。将来は除伐や間伐といった作業も加わることだろう。

その森づくりに今夏も家族で参加できた。子どもたちは何日も前から森づくり前日の川遊びを心待ちにしている。残念ながらもう香川県ではなかなか体験できないものだ。実は僕自身も楽しみにしていたりする。大人だって無邪気に川遊びしたいのだ。夜は灯りのない真っ暗な道を歩くナイトハイクで星空を楽しむ。空にはこんなに星があったのだと感動した。流れ星が数回流れた。娘は見損ねたと横でふくれている。あの

冷たい、透き通る川や漆黒の夜。テレビやパソコンでは経験することのできない実体験。これはいつかきっと子どもたちの力となってくれることだろう。素敵な時間を子どもと共有できる幸せをしみじみと感じる。

その晩、村の方の話を聞く会が開かれた。

「早明浦ダムができた時も、できてから後もこの村が得たものは何もないのです」。村をダム底に沈めざるを得なかった無念の言葉だ。胸に突き刺さる。

翌日は暑さの中、長柄の鎌を持ち下刈りに精を出した(つもりだ)。体中から汗が噴き出る。子どもたちには(いや大人にも)しんどい作業だ。山を渡ってくる風に作業をちょっと一休み。なんて気持ちがいいんだろう。その風は山で仕事をした人だけにくれる山の神様のご褒美だよ、と本川村のHさんから後で教わった。ほんとうに最高のご褒美だ！

ふと昨夜の言葉が脳裏をよぎる。

早明浦ダムの名を知らない香川県民はいないだろう。それほど早明浦ダムの貯水量は気に留められ夏場は毎日のように新聞・テレビで報道される。早明浦に降る雨に一喜一憂はするが、しかしその先はない。蛇口から出て来る水は自然に出て来るのではないのだ。その先にはダムがあり、そのまた先には森がある。ダムの犠牲になった土地があり、人がいる。そして森とともに暮らし、森を守り、森をつくり続ける人たちがいる。そのことに気づいている人は少ない。偉そうに書いている僕もこの森づくりに参加するまでは全く知らなかった。本当に申し訳ないことだが、それが大部分の香川県民の実情だと思う。

そんな中で「交流の森づくり」は現在まで二十六回実施され、のべ一、一二二人の参加があったと聞く。これはとても小さな活動なのかもしれないけれど、続けていくことにその意義はあるのだと最近になって僕にもわかってきた。単に「水源の森づくり」ではなくて「交流の森づくり」なのだ。

僕はこの森づくりに参加するのを本当に楽しみにしている。嶺北の自然を満喫しながら、森づくりに汗をかく。そしてなにより地元の方々とのふれあい……。

僕に何ができるのかはまだわからない。その答えを探しにまた出かけて行きたいと思う。こんな僕でよかったらまた温かく迎えてくださいな。

(＊) http://www.dx.sakura.ne.jp/~donguri/ (よかったら覗いてみてくださいね！)

いずみたよしのぶ／どんぐりネットワーク素人スタッフ

# 魚談義あれこれ

## ③高知の魚

岡村　収

現在、日本産魚類は三、六〇〇～三、七〇〇種の範囲にあると見積もられた。では、わが郷土高知県に産する魚類はそのうち何%を占めているのであろうか。一九八四年に出版された「日本産魚類大図鑑」によると、北海道周辺海域はおよそ七〇〇種、富山湾からは六〇〇種、駿河湾産魚類は一、〇〇〇種をやや超えるのに対し、高知県産は実に一、三〇〇種に達すると明記されている。さらに、それ以来記録された魚種を加えると、現在では一、六〇〇種に達するとみられる。これは全国産の実に四三～四五%に相当し、海洋県高知を如実に示す数値となっている。

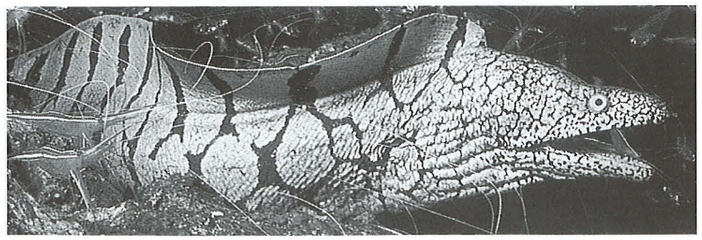
### 海水魚

前述の高知県産一、六〇〇種の中には河川に棲む魚たちも含まれている。コイ・ウグイ(いだ)・オイカワ(はや・はえ)・ナマズなどは淡水域を生涯の棲み場とするため一次淡水魚(または純淡水魚)と呼ばれ、高知県では五五種類が記録されている。また、アユ・ウナギ・ヌマチチブ(ごり)などは海と川を往来するため二次淡水魚(回遊性淡水魚)と呼ばれ、今までに三一種が確認されている。

これら計八六種の淡水魚を差し引いた、残る一、五一四種の海水魚類相がどのような特徴をもっているか、を分析したのが表1である。まず、その魚が海のどの部分を主要な棲み場とするか（生態型）によって区分する。次いで、その魚の分布中心（分布の南限と北限の中心点）の位置によって、北方系か南方系かを決めるのである。もし、分布の中心点が北緯二三度(北回帰線―台湾中部)より南にあれば南方系、北緯三五度(房総半島と島根県浜田)より北であれば北方系とし、中間地点にあれば温帯系としてある。分析の結果は驚異的で、高知県産海水魚の約七〇%は南方系魚類で占められているのである。しかも、その大半は熱帯性と見てよい。これは、土佐湾が大きく東西に開け、黒潮の影響を強く受けていることによるが、とくに足摺半島の西側で大きな黒潮分流が北流しており、熱帯性魚類の大きな供給源となっている。その例として、柏島での九〇〇の記録魚種を挙げることができる。このような小島で九〇〇もの魚種は日本全国に例がなく、空前絶後の記録である。これに沖ノ島のみで発見されているハワイウツボなどを加えると、高知県西南諸島全域の魚種は一、〇〇〇種に達する可能性が強い。このように、高知の魚類相の豊富さには黒潮が大きく貢献しているが、東シナ海や南シナ海に繋がる大陸棚経路と南方海域に繋がる九州―パラオ海嶺経路も、

表1　高知県産海水魚の生態区分とそれぞれに占める南方系、温帯系、北方系魚類の割合（上：種数、下：パーセント）

| | 内湾性 | 沿岸性 | 表層性 | 中深層性 | 底生性 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 南方系 | 60<br>(3.9) | 600<br>(39.6) | 69<br>(4.6) | 30<br>(2.0) | 283<br>(18.7) | 1042<br>(68.8) |
| 温帯系 | 8<br>(0.5) | 210<br>(13.9) | 2<br>(0.2) | 8<br>(0.5) | 232<br>(15.3) | 460<br>(30.4) |
| 北方系 | 0 | 0 | 4<br>(0.3) | 0 | 8<br>(0.5) | 12<br>(0.8) |
| 計 | 68<br>(4.5) | 810<br>(53.5) | 75<br>(5.0) | 38<br>(2.5) | 523<br>(34.5) | 1514種 |



ハワイウツボとオキノスジエビ（日本の海水魚，山と溪谷社より）



底魚の重要な来遊コースとして見落とせない。

### 河川魚

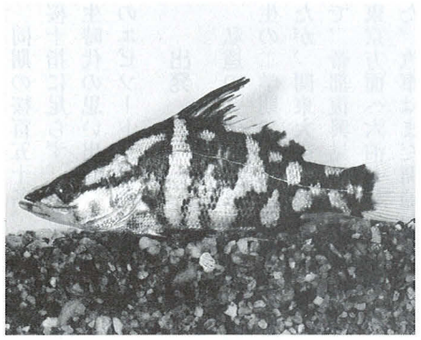
河川魚とは新造語である。意味するところは、河口の両岸を結ぶ線から内側、つまり河川水域内で記録された魚たちを指す用語である。一般的には川魚とも言うが、川魚は前出の淡水魚のみを指すイメージが強い。ここでは、汽水魚と河川に侵入して来る海水魚も含める必要がある。

一九六五(昭和四十)年以前に記録された高知県の河川魚は、一次淡水魚三一種(うち、移入魚七種)、二次淡水魚一〇種、汽水魚を含む海水魚二五種、計六六種に過ぎなかった。昭和四十年を境に、高知大学や愛媛大学、高知県による調査が開始され、仁淀川・鏡川・四万十川の順に魚類相が明らかにされ始めた。また、建設省による河川水辺の国勢調査や多自然型工法箇所の追跡調査によっても、記録種数が飛躍的に増大した。さらに、一九九七(平成九)年には高知県野生動物保護対策検討委員会が設置され、本年三月末まで調査活動を継続した。この委員会の目的は、各分類群別の調査を行い、全種数を把握し、危機に瀕(ひん)している種の危険度のランク付けを行い、その保護施策を高知県知事に提言することであった。この調査の結果、高知県下の河川魚は二一六種という全国トップの種数に達し、海洋と同様河川も種が豊富であることが明らかとなった。その一方で、何らかの形で保全の必要に迫られている種が五四種(二五%)にも達していることも明らかとなったのである(表2)。

表2　高知の河川魚216種類中の危急種

| レッドデータランク | 該当種 | 種数 |
|---|---|---|
| 絶滅 | 小卵回遊型カジカ（せがま） | 1 |
| 野生絶滅 | 飼育個体のみ生存 | 0 |
| 絶滅危惧ⅠA類 | スナヤツメ、ヨウジウオ、アカメほか | 4 |
| 絶滅危惧ⅠB類 | オオウナギ、イシドジョウ近似種ほか | 13 |
| 絶滅危惧Ⅱ類 | ドロクイ、モツゴ、カマキリほか | 9 |
| 準絶滅危惧 | アカザ、メダカ、カワアナゴほか | 12 |
| 情報不足 | ミツバヤツメ、オオキンブナ、コボラほか | 9 |
| 地域個体群 | 四万十川水系のサツキマスほか | 6 |
| 合計 | | 54 |

高知県全域　54/216＝25%、四万十川　31/161＝23%



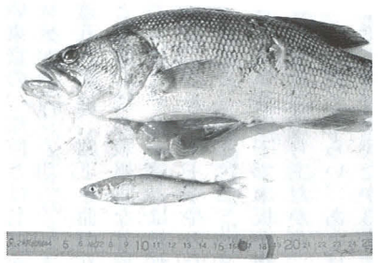
アカメ（絶滅危惧ⅠA類）

### 人の勝手都合と魚たち

河川魚が危機に瀕している要因は様々であるが、要するに人間による便利性と利益の追求にあると言えよう。百年レベルの問題としては広葉樹林から針葉樹林への植林化や、ダムの建設が挙げられる。種々の樹木からなる広葉樹林に対し、植林は一種のみで根の深さは一定となり、崩落し易く保水力も弱い。その結果、水位低下や渇水、濁りが生じ易くなる。ダムも赤潮の発生や濁りを生じるほか、出水時の一過性の濁りを延々と滞留させる作用がある。また、十年レベルの問題としては、河岸沿いの道路の拡幅工事や護岸工事など、各種土木工事による土砂投棄もしくは放置がある。さらには、養豚・養鶏の屎尿や各種排水による汚濁と富栄養化も問題である。しかし、便利性と利益の追求が生んだこれらの要因も、環境への多面的配慮を行えば解消できるのである。自然林と植林のバランス、ダムにおける選択取水装置等による濁水の軽減、土木工事による土砂投棄や放置の規制、多(近)自然工法による自然の保全、共同排水処理施設の設置等々である。

最後に、人の生活には関わりなく、単なる趣味が環境破壊の要因となっている事例を挙げておきたい。それはオオクチバスなど強肉食性魚類の野放図な放流である。その強力な捕食能力が在来種を圧迫している吉野川の事例を高知県に生じさせてはならない。釣具メーカーなどが唱えているキャッチアンドリリースなどという似非(えせ)ルールとはきっぱりと縁を切り、キャッチアンドイーティングを実行すべき時である。

（おかむらおさむ／高知大学名誉教授）



オオクチバスと捕食されたアユ

# こんなことがあったぞね

## 修学旅行に行ってみれば

中山俊子

同期の桜百五十名、散り残った姥桜十指に足らず。顔を合わすと女学生時代の思い出話。今日は修学旅行のエピソードを、そっと。

### 出発

私達の女学校では県外旅行は四年生の二学期で、従来関西方面であったが、関東大震災の翌年であったので、帝都復興見学の意図もあってか、東京方面へ六泊七日の日程と決まった。汽車はまだ開通していなかったから、本州へ行くには汽船に頼るしかなく、当時、土電桟橋終点の南詰の岸に接続していた、狭い粗末な桟橋から阪神航路の汽船が出ていた。天佑丸、滋賀丸などの後に室戸丸、浦戸丸と優秀な汽船が就航するようになった。

大正十三年十一月某日、待ちに待った出発の日である。旅費は覚えてないが、小遣いは十円以内と決められていた。当時米一俵買ってお釣りが来る金額だから、相当なものだったと思う。お小遣いは腹巻きに、着替えや小物はバスケットに詰めて、桟橋に向かった。

ところが予期せぬ事態が待ち受けていた。室戸丸が横着けになっている桟橋に、大勢の人が男子学生の一団を囲んでいた。中には旗を持った人もいて、ワアワア気勢を上げている。

引率者中ただ一人の男先生ニコチンことY先生が、トレードマークの笑顔を常になく緊張させて「列を乱さず、脇見をせず、敏速に乗船して下さい。船室に入ったら決して甲板に出てはいけません」と厳重な注意を行った。

私達は、人込みを縫って慌ただしく乗船した。

「一体どうなっちゅうが」と顔を見合わせていると、相撲通の日子さんがそっと説明してくれた。「全国中等学校の相撲大会が、堺の浜寺で始まるきね、高知県からも一中の前田、市商の山崎、師範の大畠、工業からも誰やらと実力者が出場する。その選手がこの船に乗るがよね」。

ああそうかと皆がうなずいた。

「いやあ選手を見たいねえ」「応援したたかまうかね」とにわかに騒がしくなったが、相変わらずニコチン先生、硬い表情のまま出入り口で頑張っているので、手も足も出ずおとなしく着替えなどしていると、船体を揺るがすような太鼓の音が響き万歳万歳の声、ドラが鳴り渡る。出航だ。翌朝の下船時を楽しみにしていたが私達は神戸、選手団は大阪であろう。ついにその雄姿は見ることなく幻に終わった。

### 痴漢騒動

東京での第一夜、復興の進んでいない東京の、旅館とは名ばかり、バラック建ての寄宿舎のような建物、私達五人組は、廊下を曲がり布団部屋と物置の隣の殺風景な部屋を割り当てられた。友人達とは離れた場所である。アルバイト学生みたいな男が、夜具を三閨(ねや)敷いて出て行った。Kさんは先刻廊下で床板を踏み破った程の重量の持ち主だから、一人で端っこに寝てもらい、あとは二人一ねやで、疲れていたからすぐにぐっすりと寝入った。

「キャーッ」という凄い悲鳴ではね起きた。黒い影が障子の間をすり抜けて逃げた。

一瞬のことではあったが、確かにアルバイト男の後ろ姿と見た。悲鳴の主はKさん、大きな体をぶるぶる震わせてしゃくり上げて泣いている。

「怖かったろう」と肩に手をかけると、「何やらモサモサするき目が覚めたら、いきなり抱きついたき思い切り突き飛ばし、ひせったら逃げた」と泣き泣き言う。「先生に知れたら学校やめさせられるかも知れん」とも言う。まさかそんなことはあるまいが、男子禁制のきびしい学校である。出発の時の戒厳令も思い出される。さあこれは大変なことになった。

鍵もかからぬ部屋だ。つっかい棒でもしなくてはならなかった。組の責任者である私にも落ち度があった。幸いKさんに怪我もなかったことだし、絶対誰にも話さないこと、部屋も離れていて他には気付いた様子もないので、固く秘密を誓い合い、やっと泣きやんだKさんを真ん中にして寝床に入ったのは明け方近くであった。

この事件は帰校後Kさんが東京の宿で大の男を投げ飛ばし、力余って床を踏み抜いた、という武勇伝となって伝わった。

### 琵琶湖周航の歌

花の吉野山へ秋の旅もどうかと思うが、東京からの帰途、歴史を訪ねて一泊した。

夕食後許可を得てお土産を買いに出た。季節外れのひっそりとした店で買い物をしての帰り道、木陰のベンチで五、六人の学生が歌っているのは、汽車の中で覚えたばかりの、琵琶湖周航の歌だ。立ち止まって聞いていると、「どこの学校だ」と聞かれた。「土佐女学校です。あんた達は」と尋ねると、「滋賀師範だ」と言うので師範と聞いて安心して傍らのベンチに腰かけて、「今の歌、はじめから歌って下さい」と頼むと、さすが先生の卵、一人が枯れ枝を拾ってタクトをとり、ハーモニカの伴奏が入って、

「我れは湖(うみ)の子放浪(さすらい)の旅にしあれば——と山峡のしじまに流れる歌声にうっとりと聞き惚れているうちに眠れ乙女子、安らけく——と歌い終わった。ハッと気がついた。門限だ。

「どうもありがとう」「元気でな」

お互いに住所も聞かず、名も告げず別れた。

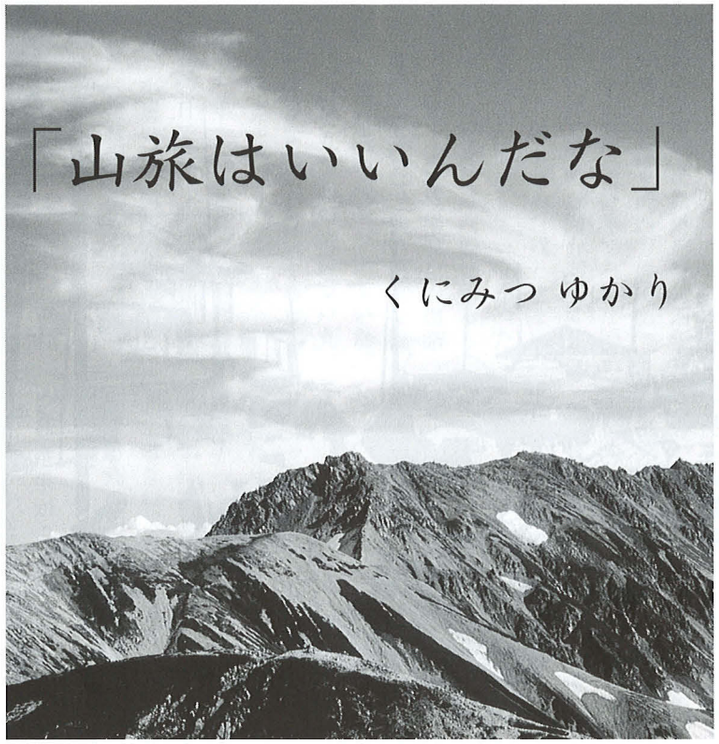
翌朝宿の前で整列している時、山の上の方から滋賀師範の生徒が隊伍を整え、ザックザック靴音を立てて、下りて来た。私達の並んでいる前に来かかると、先頭の指揮者が、

「歩調とれッ　頭(かしら)右ッ」と号令すると一斉にこちらを向いて、ハッと挙手の礼をして通り過ぎて行った。私達の胸にさわやかな力強い、青春の足音を残して。　（なかやまとしこ）

大正初め頃の潮江桟橋（高知市民図書館蔵「寺田正写真文庫」より）

# 「山旅はいいんだな」

くにみつ ゆかり



この夏は立山に行った。年一回くらいは信州あたりの山に行こうと、山仲間で誘い合っている。だが、ここ数年、仕事の責任が重くなってきて、全員の都合をつけるのが難しくなってきつつある。去年は直前のキャンセルという事態に涙をのんだ。

四国の山も十分楽しいが、高知を離れる旅、というのがいい。今年は、わたし以外の三人の「前の日から旅にでたい」という変な意見に押され、仕事を終えてそのままフェリーに乗り込んだ。数時間前までは仕事をしていたのに、フェリーに乗った途端、旅気分。風呂に入って缶ビールを開け、明日はどこで何を食べようかの話題で盛り上がり、毛布にくるまった。

山が好き、と言うと、ものすごくたくましいワンゲル女を想像されるかもしれないが、山ではわたしは「ノロガメちゃん」と呼ばれる。それでも、三、〇〇〇メートル級の穂高や槍に登れたのだから、カメも偉い。山頂を目前にした最後の急登では、心臓がバクバクして泣きそうになる。一歩一歩踏みしめる足元には高山植物が咲いている。厳しい条件で、強く優しく咲いている花に、いつも励まされて登る。温室育ちの病弱なわたしには、憧れの「高嶺の花」だ。

森の中を歩き、太陽とともに寝起きする生活は、身体に新鮮な息吹を与えてくれる。自然の中で数日過ごす、そのこと自体楽しいが、仲間たちと長い時間を共有することもいいなと思う。

二十四時間いっしょの数日間、ぽつぽつとお喋りしながら歩いたり、黙ってただただ落日を眺めたり。大いびきをかくMさんより一秒でも早く眠りに入ることが快眠のポイントだし、朝の出発時には「トイレ、出た？」などと聞かれて正直に申告するから、男仲間とは色気のない家族のような友達関係になってしまう。空腹で夕飯が待ち遠しくて、「食べ物しりとり」をして時間をつぶそうとしたが、余計におなかが空いたり、込み合った山小屋で一枚の布団に三人の割り当てになり、「三人で寝る練習をしてみよう」と試してみたり……、すっかり子ども気分だ。

足を痛めてようよう下りてきたことや、突然の大雪に寒さにふるえながらビールをのんだことも、その時は、かなりシビアな事態なのに、思い出はどれもが楽しいハプニングだ。

それでも山小屋で「今年の死亡△人」という表示を目にするとどきりとする。山は「死」とも隣り合わせ。本当は普段の生活も同じなのだが……。山小屋のテラスでぼんやり過ごす夜は、亡くなった大切な人を思い出したりする。ああ今日も無事、そんな時、自分が生きて今ここにいるということにごく自然に感謝することができるし、「生きて在る偶然」を実感する。

「海の好きな人は詩人、山の好きな人は哲学者」と誰かが言っていた。山旅では、来年のわたしのテーマはどうしようか、みたいなことをぼんやり考える。そんな空間と時間を作れるのも、山旅のいいところ。

山に入るにつれ、仕事のことはだんだんふっ飛んでいくが、帰りの電車の中で（あの原稿、どうなったろう）とにわかに焦ってくるのには苦笑してしまう。

（くにみつゆかり／南の風社編集長）



# 涙の学芸員ブルース

松本教仁

頑丈なクレート（作品専用木箱）に収められて、ニューヨークよりアンディ・ウォーホルの作品はやって来た（今年２月、県立美術館搬入口にて）

「美術館にお勤め？、学芸員？、まぁ優雅なお仕事ですねぇ」、「気品ただよう職場ですね」、「むずかしい顔して本ばかり読んでるんでしょ」等々、美術館で働いていることを知られると、話し相手からは決まってこのような言葉が返ってくる。それら羨望めいた言葉の裏には「こんなご時世に楽して給料せしめやがってコノヤロウ」というニュアンスがぴったりと貼り付いているような気がして、以前ならばやっきになって「そうじゃないんですよ、実はですね―」といちいち反論を試みたものであったが、近頃では年齢のせいかその気力も失せ果てて、なかば自嘲気味に「そうなんですよ。高価な絵に囲まれて、日がな一日展示室で静かに思索にふけっています」とか「毎日画集ばかり見て、ヒマで困っています」などと応えるようにしている。すると「やっぱりね」と深々納得されてしまう場合が少なくないので、これはマズイかなと思ってはいるのだが。

ところで、「御馳走」ということばがある。あまりにも使い古された〝たとえ〟なので、碩学を誇る読者諸兄の前に今更これを持ち出すのはいささか気恥ずかしいのだが、蛇足を承知でご説明すれば、お客をもてなすひと皿の料理のために、市中駆けずり回って食材を集め、創意工夫を凝らすという、そのお客をおもんばかる亭主のもてなしの心と清らかな汗（?）を表したことばである。

美術館の展覧会もその「御馳走」のようなものである。お客様においしく展覧会を味わっていただきたいがために、亭主（＝学芸員）は日本国中、時には海外まで走り回り、良質の食材（＝作品）を集め、上手に調理味付けし（＝展覧会のテーマ、コンセプトづくり）、それらを盛る器（＝会場の作品展示レイアウト等）にも気を配って、ようやく「どうぞおあがりください」と静かに配膳（＝開幕）するところにまでこぎ着ける。

つまり、良い御馳走（＝展覧会）をつくるには相当の苦労が付きものなのだ。座して本ばかり読んでいて、展覧会が出来上がるならこれほど楽なことはない。学芸員は超能力者ではないので、念力で作品を美術館までパッと瞬間移動させるなど出来やしないのだ。やはり作品を集めるためには個性（アク）の強い作家やコレクターを相手に、何年も前から地道な出品交渉作業を続けなければならないのである。それら女工哀史を彷彿とさせる学芸員の日々の辛い業務の数を指折り数えていけば、すぐに一冊の分厚い本が出来上がってしまうだろう。

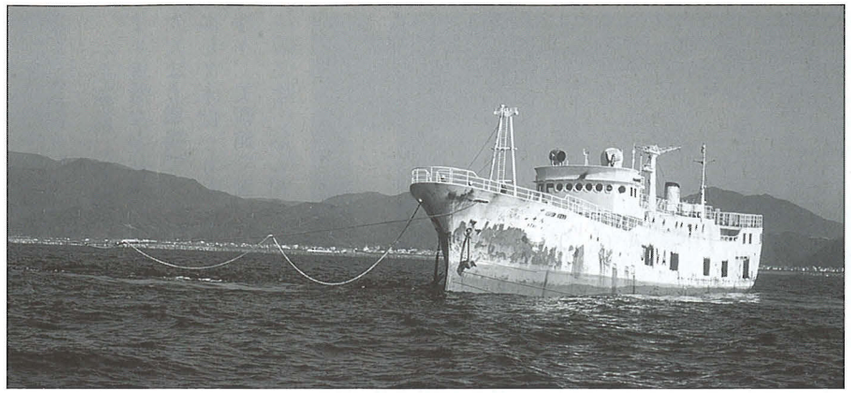
だが考えてみれば、その学芸員の苦労を表に出すことは格好悪い話だ。いくら市中駆けずり回って出来た御馳走でも、汗ドロドロの姿で「へい、お待ち！」と持ってこられては、お客様はシラけるだけだろう。それまでどのような苦労をしたとしても、お客様の前では常に楚楚とした姿でいて、おいしく展覧会を召し上がっていただきたいものである。

最後に別のお話を。近年、学芸員資格の取得を目指す女子大生が急増している。何故だろうねと思っていた矢先、ある女子学生と話していてその理由がわかった。本当に学芸員になろうとする学生はごく稀で、その真の目的は将来の結婚式披露宴の折りに、司会者による新婦紹介時に「A子さんは博物館学芸員資格をお持ちの、実に優秀な方で～」と紹介してもらうためだそうだ。いやはや…。

（まつもとのりひと／高知県立美術館主任学芸員）

高知を撮る

第16回写真コンテスト入賞作品



## 沈　船

（平成11年　室戸沖）

横矢実穂

21世紀の大漁の夢を託して、魚礁となるよう室戸沖で船が沈められた。

# 海洋深層水の〝効用〟

風俗歳時記

「海洋深層水」も一定の知名度を得て、さまざまな応用が模索されている。一つの流行と言えよう。

中には、流行に悪乗りした、かなり胡散臭いものも混じっているようで、評価が定まるまでにはかなりの歳月を要すると思われる。

評価が分かれる原因の一つは、深層水のどの成分が、どのように効くのか、という効用の仕組みがはっきりしないことにある。仮に〝有効成分〟が推定できても、その有効成分はその含量、または、存在様式が〝ふつうの〟海水とかなり違っていなくてはつじつまが合わない。最近の高感度の測定器にやっとひっかかるような差を持つ水を、少量飲んだり、塗ったりすることで効果があるという話はにわかには信じられない。

こんな時、NHKのテレビで、思わぬ光景を見て愕然とした。室戸では、最近取水量を増やしたので、使いきれない水や飼育に使った水を大量に海に返しているようである。その水の流路一帯に多くの海藻が繁り、エビやウニの楽園になっている。昔、我が国の磯でごく普通に見られた風景である。

最近、我が国の沿岸では、いわゆる〝磯焼け〟現象が進行し、海藻も小動物もいない海の砂漠が至るところに見られる。この〝磯焼け〟最大の原因は海水の汚染である。特に、家庭用洗剤と農薬がその元凶と言えよう。これらに含まれる物質は、海の微小生物に致命的な影響を与え、海の生態系を壊してしまう。

海洋深層水の〝排水〟の流路には、狭いながらも、昔ながらのきれいな海水による生態系が形成され始めたに違いない。

つまり、海洋深層水と〝ふつうの〟海水との違いは、深層水に何が含まれているのか、ではなく、何が含まれていないか、という違いにあるのではなかろうか？　深層水の特徴はこの視点からも検討する必要があるように思われる。

深層水が我々に、海水の汚染の恐ろしさを改めて教えてくれるとするならば、それこそ、深層水の何よりの効用といえよう。

（路）

県警本部の移転により道筋が大きく変わり、高知城の北側に短いながらもゆったりとした遊歩道が生まれた。いくつかあるベンチに座ってひとやすみしている姿も見かける。

春にはみごとな桜が楽しめ、夏はひんやりした森のにおいがかすかに届く。そしてもうすぐ江山の銀杏が黄金色に輝く季節。官庁街での仕事の合間にちょっと遠回りして歩いてみたくなる、そんな人も増えるのでは。

## 風伯

# 虹

〈岩合光昭のネイチャーワールド〉というテレビ番組を観ていたら、アフリカの砂漠に雄大な虹が立つ光景が出てきた。

画面の虹に見惚れながら、「随分長いこと虹を見たことがないな。」と、ふと想った。

その後、友人のたれかれに訊ねてみたが、ほとんどだれもが、見ないと言う。

なかには、「さだちが降らなくなったからだ。」と力説する者もいる。

〈さだち〉というのは、〈夕立〉もふくめて〈にわか雨〉を指す高知弁で、県下全域で使われている。（『高知県方言辞典』）

そう言われてみると、さだちがさっぱり降らなくなったような気もする。

かつては、〈台風銀座〉と呼ばれた高知県だが、〈二百十日〉、〈二百二十日〉には、きちんとやってきた台風も、とんとごぶさた。

これも、世界的な異常気象のせいだと思われる。それとも、近年虹を見かけないのは、当方の出不精や、自然への驚きが衰えたせいなのだろうか？

かねて、〈虹〉はなぜ〈虫偏〉なのか気になっていた。辞書によると、〈虫〉（ヘビ）＋音符〈工（こう）〉（つらぬく）。「天空を貫く大蛇に見たてた呼び名」であるという。

（仁）


# 賛助会員募集中

**年会費2000円で**
**どなたでも入会できます**

ご入会いただくと……

「文化高知」を年６回
　お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を
　10％割引いたします。
（事業団で直接お求めの場合）

お申し込みは……
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。


## 今号の表紙

「やまもも」　　池　敬子

一昨年秋のインターナショナル・キルト・ウィークで「47都道府県の花」をキルトで飾ることになり、高知代表として「やまもも」を出品しました。制作日数が少なく、夜中まで縫ったことが想い出されます。家族やいろいろな人々の応援もあって、おいしそうな実がたくさん付きました。高知のシンボルでもある「やまもも」をキルトで楽しんでいただけたら幸いです。（いけけいこ・キルト作家）

文化高知 No.98 [隔月発行]
2000年(平成12年)11月1日発行

# 第11回高知出版学術賞推薦募集

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】
次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。
①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
②2000年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

【推薦】
自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書2部を添え、審査委員会まで提出して下さい(図書は返却しない)。なお、推薦書は請求下さればお送りします。

【受付期間】
平成12年12月11日(月)～平成13年1月31日(水)

【表彰】
3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

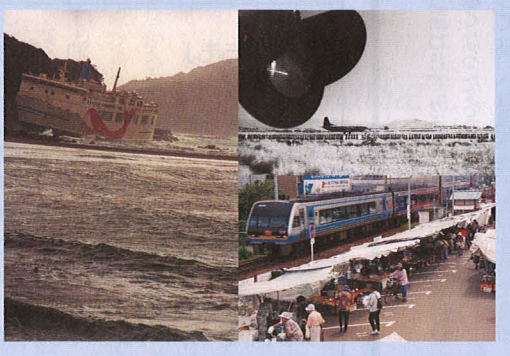
【推薦・お問い合わせ】
(財)高知市文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会

# 第17回 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

【テーマ】高知を撮る
＊高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

【応　募】
＊どなたでも、一人何点でも応募できます。
＊254㎜×365㎜(ワイド四ツ切)以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。

●第16回入賞作品



＊組写真は3枚までで、組写真であることを明記してください。
＊その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

【応募締切】平成13年1月31日(水)

【賞】　特選　2点(賞状と賞金5万円)
　　準特選　15点(賞状と賞金1万円)
　　入選　70点以内

【作品展】
平成13年3月市民フロアにて開催予定

【応募先】
＊(財)高知市文化振興事業団
＊高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-0870 高知市本町五丁目2番3号
TEL&FAX(088)873-4365／郵便振替01680-5-14869
http://www.i-kochi.or.jp/hp/bunshin
E-mail bunshin@i-kochi. or. jp